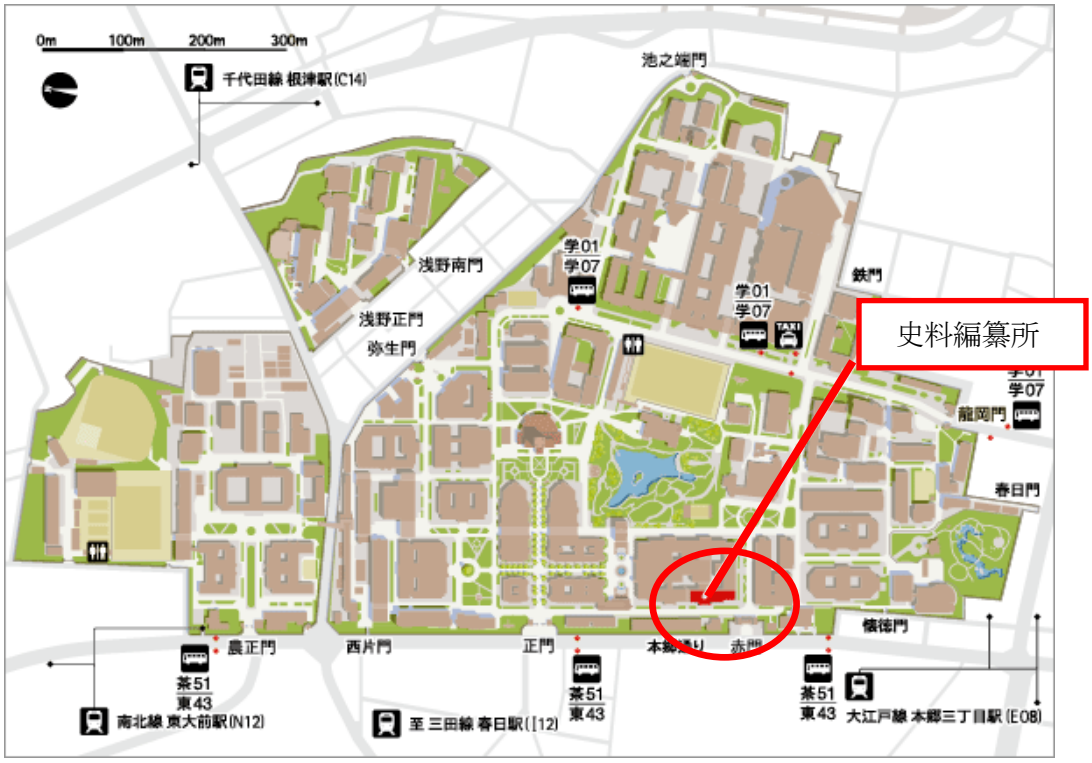
２０１０年８月２日
東京大学史料編纂所

記者会見　イェール大学より『古文書屏風』が76年ぶりに東大に里帰り

１．会見日時：　２０１０年　８月　９日（月）　１４：００　～　１５：３０

２．会見場所：　東京大学史料編纂所２階　演習室



３．発表者：　東京大学史料編纂所　所　長　　榎原　雅治
教　授　　近藤　成一
技術専門職員　　高島　晶彦

４．発表概要：

本学と国際交流協定を締結している米国イェール大学所蔵の「古文書貼り交ぜ屏風」が、修復のために本学史料編纂所に送られてきました。この屏風は 76 年前に史料編纂所で制作され、イェール大学に贈られたものです。１世紀近くに及ぶ本学とイェール大学の友好の証といえる「古文書貼り交ぜ屏風」のお披露目と今後の修復計画について発表します。

このあと、屏風を解体する作業にはいりますので、現状を直接確認できる最後の機会となります。ぜひ多くの方のご出席をお願いいたします。

５．発表内容：

７月 23 日（金）、イェール大学より、同大学附属のバイネキ貴重書図書館が所蔵する「古文書貼り交ぜ屏風」が、史料修復のために史料編纂所に送られてきました。

本学は、イェール大学との間で、教員・学生の交流や共同研究・シンポジウムの実施等に関する国際交流協定を結んでいますが、このたびの史料修復もこの学術交流の一環として行われるものです。

実は、今回イェール大学から送られてきた「古文書貼り交ぜ屏風」は 76 年前に史料編纂所で作られたものです。19 世紀末から 20 世紀前半にかけて、イェール大学には欧米における日本史研究のさきがけとなった朝河貫一教授が在籍していました。

当時の米国には日本史研究のために必要な史料が乏しく、これを憂慮した朝河教授の呼びかけに応じて寄附活動を行った日本在住のイェール大学卒業生たちと、彼らからの依頼を受けて実際の史料収集にあたった東京帝国大学文学部の黒板勝美教授（元史料編纂所長）の共同事業として、この屏風は制作され、米国に贈られたものなのです。

したがって、このたびの修復事業は、この屏風の 76 年ぶりの「里帰り」なのです。また、この屏風は、１世紀にわたる本学とイェール大学の友好関係の証しでもあるのです。

二曲一双の屏風の表には、鎌倉時代に東大寺を再建したことで有名な重源の自筆史料をはじめ、指定文化財級に貴重な中世・近世史料が貼られています。また屏風の芯には昭和初期に史料編纂所で使用された書類の反故が再利用されており、この屏風が史料編纂所で制作されたことが確認できます。

この屏風は今後１年以上をかけて、史料編纂所の史料保存技術室で慎重に研究、修復されることになります。

６．お問い合わせ先：

東京大学史料編纂所古代史料部　教授　近藤成一（コンドウ　シゲカズ）

古文書貼り交ぜ屏風